

Title	スペイン語動詞屈折語尾の構造
Author(s)	出口, 厚実
Citation	大阪外国語大学学報. 23 p.35-p.60
Issue Date	1971-01-30
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80383
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

スペイン語動詞屈折語尾の構造

出 口 厚 実

La estructura de las desinencias del verbo español

Atsumi DEGUCHI

En el presente artículo tratamos de aclarar algunos puntos fundamentales de la flexión de verbos españoles por dos distintas metodologías: la de análisis morféxico y la de la llamada “doctrina de gramática generativa transformacional.” Primero analizamos los sufijos flexionales en una serie de unidades morfológicas o morfemas para presentar la descripción de su estructura. Después se proponen unas tentativas para formular una gramática de la flexión verbal, o sea un conjunto de reglas ordenadas que generan toda desinencia bien formada.

は し め に

本稿は西語動詞屈折の形態的過程 morphological process を扱う。西語の動詞形態はたいていの文法書、教育的テキスト等で数ページ、時には数十ページにわたる語形変化一覧表で総括的に示されている。このような動詞活用表は動詞の活用類、法、時制・相、人称・数、単純・複合などを基準に分類した動詞(屈折)系列 paradigm を図表化したものである。典型的な規範文法である Gramática de la Real Academia¹ を例にとれば全体で75ページに及ぶその系列表は明らかにラテン語 conjugatio を範にして、できるだけその枠組みに合致するよう意図されて作られている。時制や法の用語、態、相の扱い方では相違点は見られるものの、動詞の基本構造のとらえ方については一般の文法書は共通している。いずれも動詞は語幹(根)+語尾で構成されるとする。各々の法、時制ごとに人称・数による別個の語尾(1時制に普通6種)を割当てて結果、その総数は1動詞(単純形のみ)につき53になり、活用類別を考慮に入れば、paradigma 全体で159に達す。これらの中には別個の単位とみなされる /-an/, /-ámos/, /-arémos/, /-íamos/, /-rán/ /-en/ のような語尾形式が見出される。ここで反復して現われる末尾の /-mos/, /-n/ を他の部分から分離し、それぞれに意味を指定できれば、これらを独立した形態的単位として認めることが出来る。動詞形態を記述する方法は屈折語尾のこのような分析を深めて体系化することである。あるいは、屈折をあらゆる可能な動詞語尾形式を生成する有限数の規則の体系としてとらえて、これらの文法規則の定式化をめざす方法がある。どちらにしても西語屈折形態論に対し

新しい考察を加えようとするのは、旧来の〈語幹＋語尾〉構成説が教授法的に見て不備である²、という理由からではない。重要な点は Bull が指摘している『動詞を語幹 stem と語尾 ending (vend-íamos) にのみ分割することが形態素の構造と動詞体系の簡潔性をおおい隠している』³ 事実である。ここでの目的は伝統的 paradigm に対して提起されて来た修正意見や構造言語学的な新しい接近法の検討を通じて、また後半では生成文法理論によって、西語動詞形態の体系的記述を試みることである。

1) 西語は多くの方言から成る。方言間の差異は音声的にも文法の諸領域に関しても決して少なくない。当面の問題に関連する部分のみ見ても、例えばカスティリャ方言とアメリカ諸方言の間には無視できない相違が存在する。最も顕著なのは、北はメキシコから南米アルゼンチンに至るアメリカ諸方言には共通して 2 人称複数形が欠如している点である⁴。また voseo の行なわれる地域では、2 人称単数形が「現在」(直説法・接続法)、「命令」形(地域によっては未来形も)が tomás, tomés, tomá, etc 半島方言にない特殊な語尾をとる。また代名詞 vos に対してカスティリャ方言の 2 人称単数形に相当する動詞形を混用する例も見られる。動詞形態を記述するのにそれではどの方言を選ぶべきなのか。もとより一言語の特定方言が、他の方言にまさる内在的な価値をもつと信ずべき理由は何もない。ただ特定の地域あるいは社会階級の方言が言語共同体成員の多数に、標準ないしは模範として採用され、さらに進んで諸方言を標準化する勢力を持つようになる事実は一般に認められている。西語のカスティリャ方言はこの地位を獲得し、アメリカ全域で、ことに教養階級に対するその影響力は著しい。このような事情からして上述の voseo の分布は西語使用圏全体から見れば周縁的であるので、これを行う方言を問題外としても、例えばメキシコ方言をアメリカ西語、または西語の代表として記述の対象とすることもできるし⁵ カスティリャ語を採ることもできる。本稿では後者を選んだ。それは現在のところ資料が最も身近にあり、またその音声部門でも比較的信頼のできる豊富な研究の成果⁶ が利用でき、他の諸方言にはそれがほとんど不可能であるという理由だけである。理想としては地域的な差異を余すことなく完全に示すような、西語諸方言の抽象的な根底にある文法を想定すべきであろう。そのため、根底にある組織的な記述を最も簡単に説明できる方言を選択すべきであるという主張がある。しかしメキシコ方言を例外として⁷ 他のほとんどの方言は、これから論じたいと望む方法での研究が進んでいない現状では、当然一つの方言を選んで、他の方言を全く考慮しない記述を行わなければならない。

2) 動詞の屈折形態は統語的特徴(文法的意味)と一致して語形の一部又は全部を転形せる「屈折」によって実現された一定数の動詞形式の集合である。言語組織は本質的に規則的な現象と本質的に不規則な、すなわち特異的な、個々様々なものを持っており、動詞の形態的過程についても同様である。動詞形式はそれが一般的規則によって予想されうる範囲に含まれるか否かにより 2 大別される。いわゆる規則・不規則動詞の区分はこれによる。次節以降で検討の対象となる資料は、前者の語形である。なぜならば後者の動詞形式は、前者の規則というものが定義された後

に始めて明らかにされるものであり、まさにここでは規則的活用といわれる場合の規則性あるいは規則を形式的に体系化しようとするからである。なお規則的語形のうち、今日、口語にも文語にもほとんど使用されない接続法未来形と、統語論の領域と係わり不規則語形を扱う、複合形は考慮されない。

3) 言語形式を形態素の連鎖として記述する方法がある。これによれば、西語動詞はそれ自身で自由形式であり、同時に語彙的意味をもつ完全形態素 full morpheme である基体 base と、空辞拘束形態素 empty bound morpheme である屈折接辞 affix の2つの文法形式から構成され、両者の順列は一定しており前者が常に先行する。基体（語幹）と接尾辞の境界は、paradigma の中で、1動詞の全形態に繰り返して現われ、またどの環境でも同一音形を示す部分、例えば /am-/ と他の部分との間に容易に見出される。西語では、動詞幹は一般語根と形態的に同一で、派生接辞をとれば異なる文法範疇の形式になるが、基体そのものは拘束形式で、/am-/ なる語は存在しない故、すべての動詞形式は屈折形 inflected forms である。ところで基体から分離される各語尾の形態を調べて見れば、ある語尾中の一部分が系列表の特定位置で繰り返して同じ音形で出現することに気づく。例えば /-mos/, /-n/ がそれである。屈折接尾辞には統語関係を示す複数の情報が含まれており、それらは伝統的な用語で法、時制、人称・数と呼ばれるものである。/-mos/, /-n/ は常にこれらの情報の1つと結合しているから、明らかに一定の文法的「意味」、それぞれ「1人称複数」、「3人称複数」の主語を指示する標識としての機能を持つ。従って /-mos/, /-n/ は形態素の資格を有すと考えられ、屈折語尾は必ずしも最小の形態的単位でないことが明らかである。/-s/ と /-ste/, /-is/ と /-is/, は相補分布をなし、それぞれ共通の意味「2人称単数」、「同複数」で特徴づけられる故、形態素 {S}, {IS} の異形態と認められる。動詞1・3人称単数形にはこのような明瞭な形態的特徴が見当たらないが、これは他の「人称・数」形態素が屈折語尾中で右図のような位置に現われる事実と関係があるように思われる。

つまり1人称及び3人称単数の標識が〇形態と解釈できる可能性を示唆している。一方、例えば直説法現在の「1・単」語尾 /-o/ を「人称・数」形態素として、他の屈折範疇すなわち「法」、	1人称単数——
「時制」が共に〇で、あるいは「法・時制」が〇で表現されるという見方もある。	2人称単数——s
一般に〇形態素、異形態を容認するか否か、どの範囲内で認めるか	3人称単数——
が、屈折範疇の種類、及び屈折接辞を構成する成分の数を定める基礎となる。それ故、屈折語尾を形態的単位に分析する方法は次のように分類できる。	1人称複数——mos
	2人称複数——is
	3人称複数——n

A 動詞形式は一定数の形態素の序列からなる。

1. 〇(異)形態を一切認めない。
2. “ を「人称・数」語尾には認める。
3. “ を全屈折範疇に認める。

B 一定数の形態素で構成されるが、二つ以上の形態素が単形態に表わされ得るとし、〇を認

めない。

C 形態素数は語形によって変り一定しない。

1. ∅(異)形態を認めない。
2. " をある範囲内で認める。

4) A 1 は屈折語尾をそれ以上分割されない最小の意味単位としてとらえ、動詞はすべて語幹＋語尾で構成されるとする伝統的な考え方である。⁸

これによると規則動詞は $53 \times 3 = 159$ の屈折単位で説明され、それを図式化したのが paradigm 方式であるが、分析可能性が残されているからこれをすべて文法的な最小単位として認めることはできない。Bull の語形変化表⁹は A 2 に属す。彼は「人称・数」末尾 Person and Number Terminals として、∅, -s~-te, ∅, -mos, -is~teis, -n¹⁰ を分離して、語幹、法・時制・相、人称・数末尾の 3 要素を動詞の構成素としている。6 種の「人称・数」形態素 (8〔9〕¹⁰単形態) と 24 の「法・時制・相」形態素 (36単形態) の組合せで動詞定形を全て記述できるから、A 1 に比べればかなり簡潔である。

動詞形式が 4 要素から成ると見れば、当然∅形態を「人称・数」語尾以外に拡大する A 3 の方法になる。「人称・数」以外の屈折範疇の存在をどのように考えるかによってさらにいくつかの下位分類されるが次の 2 つが一般的であろう。

α: 語幹＋テーマ母音＋時制・法＋人称・数

β: 語幹＋テーマ母音/法＋時制・相＋人称・数

Criado de Val と Julio Meza T. は α を主張し、am-a-ba-n, cant-a-ba-is の例をあげている。¹¹ 確かに/amában/や/kantábais/などの形式は屈折語尾を 3 形態素に分離できるが、/ámo/, /amé/ はどうだろうか。彼等は、これらに対しては何ら言及してない。なお西語の pretérito と imperfecto は時制の相違ではないので、過去については「相」aspecto の範疇、「完結相」perfectivo, 「非完結相」imperfectivo) を設けなければならない。α の「時制・法」は「時制・相・法」と変更されるべきであろう。そうすれば α と β の違いは「法」範疇を時制・相との組合せに入れるか、本来屈折範疇でないテーマ母音と合体したものと見るかによる。後者によって、全語形の構成素を分離して図示したのは Stockwell-Bowen-Martin¹² である。それによれば屈折は、「テーマ母音(法)」形態素 3 (単形態 20), 「時制・相」形態素 8 (同 15), 「人称・数」形態素 6 (同 8) の連鎖で説明される。例えば直説法現在と過去完結相は次のように分析されている。

		テーマ	時制 相	人称 数		テーマ	時制 相	人称 数
1 }	abl	o	∅	∅	abl	∅	é	∅
2 }	sig	'	a	∅	s	á	ste	∅
3 }	'	a	∅	∅	∅	ó	∅	
1 }		á	∅	mos	á	∅	mos	
2 }	pl	á	∅	ys	á	ste	ys	
3 }	'	a	∅	n	á	ro	n	

‘人称・数’ 標識は、半母音 i の音素論上の解釈¹³を別として、前記 Bull のそれとほとんど同じである。直接法現在については「1・単」と「3・単」を共に \emptyset と仮定し ‘時制・相’ は同じ \emptyset であるため、/ámo/, /áma/ 両形は同一の活用類に属するのにテーマ母音の対立 o/a で区別されるという奇妙なことになる。/ámo/, /áma/ をそれぞれ am+ \emptyset + \emptyset +o, am+a+ \emptyset + \emptyset と理解すべきであろう。同様に /amé/, /amó/ は am+ \emptyset +é+ \emptyset , am+ \emptyset + \emptyset +ó の分析が可能である。いずれにしても、 \emptyset 形態が1語中に2つも並ぶのは不自然であり、また、/o/ がテーマ母音であって他の屈折範疇を示さないとか、逆に「1・単」のみを表わすという証拠は何もない。

5) β のタイプの動詞分析は Hockett によってなされた。¹⁴ 彼は /ámo/, /amé/ のような、音形と意味の切れ目を全く発見できない場合、あるいは音形の境界と意味の切れ目に明白な対応が見られないケースに対し、‘同時に2つまたはそれ以上の数の形態素に属し、同時に両者の意味をもつかばん型単形態 portmanteau morph を認める解決法を提案した。すなわち /ámo/ の /o/ は「直・現+1・単」、/amó/, /bibió/ における /ó~ió/ は「直・過完+3・単」と解し、2つの異なる屈折範疇の形態素が単一の形態素に実現されたと見る。彼によれば西語の全定動詞形は語幹+‘時制・相’ 形態素+‘人称・数’ 形態素の構成を持つ。ここにテーマ母音を含めないのは、活用母音 Conjugation Vowel を、意味を持たずどの形態素にも属さない特殊な単形態である empty morph と考えるからである。¹⁵ Hockett は amábamos, leíamos, vivíamos に見られる áb, í, í はこの empty morph の例で、amas の a は「直說法現在」の意味をもつ通常の単形態であると主張する。この点に関しては、empty morph の設定に対する Nida¹⁶ の批判もあるが、少なくとも amab/a/mos と3分して ab を無意味の活用母音とみなす考え方には問題が多い。ab に何ら文法的関係を示す情報が含まれてないとするれば、「直・現」「直・過完」の am-amos と実質上同形式になってしまうから、むしろ /ba/ を Hockett の言う tense-mode morpheme として、第2、第3活用の /a/ と共に「直・過非完」形態素に属す異形態と考えるべきだと思われる。

6) これまでみてきた A, B の分析法はどれも動詞の全形態（厳密には定形）が常に一定数の形態素から成ると見る点で一致している。記述の統一性、簡潔性を追求するためには、同数要素が動詞を構成すると考える方が有利であることは言うまでもない。しかし、他の平行的文法範疇から定義される複数の意味が分割不能な最小の音形、または極めて小さな音素連続に収約されて共起するのは西語に限らず屈折言語の特徴とも言えるが、この現象は屈折の一部分（恐らく使用頻度の高い部分であるが）にしか起らないという事実は重要である。そこから動詞構成素の数は語形によって変りうるとする C の分析が生れる。その一つは amo, ama, amé の /o/, /a/, /é/ に個々別々の形態素「直・現, 1・単」「直・現, 3・単（第1活用）」「直・過完, 1・単（第1活用）」を立て、また amábamos, amaréis を両形に共通のテーマ母音 /a/ と「直・過非完」ba+「1・複」mos, 「未来」ré+「2・複」is に分析する方法である。この C1 方式の欠陥は形態

素の数が多くなりすぎる(40を越える)ほか、 \emptyset 形態を排除しようとするあまり、全体的に明瞭な規則的平行関係の認められる「人称・数」語尾の同型性を無視している点である。この2点が最小限の \emptyset 異形態、形態素を導入することで解決されれば、むしろその方が望ましい。そこでC2の検討に移る。

形態素という単位を用いてないが Benot は活用一覧表 Cuadro sinóptico de las tres conjugaciones españolas por flexión¹⁷ でこの方法を示唆した。その中で、特に右図で表わされる「直・現」の分析は適切であろう。「テーマ・法・時制・相」形態素は直・現・第1活用 ----o で {a} であるが、「人称・数」形態素「1・単」の異形態 /o/ の前に立つ環境ではこれが脱落する。一方「3・単」の「人称・数」は \emptyset で、この環境で {a} は /a/ になると理解できる。Hockett と同じく Benot も am-áb-a-mos 型の分割を行っているが ab をテーマ母音とは規定していない。彼の表に見られる平行的な例、am-ár-a-mos, am-ar-ía-mos からすればむしろ a+子音を「(法・)時制」標識とし、後続の母音をテーマあるいは無意味な虚辞の形態と考えているようである。

a) am	á	mos	b) am	ár	a	mos	c) am	á	ra	mos
am	á	is	am	ár	a	is	am	á	ra	is
ám	a	n	am	ár	a	n	am	á	ra	n

上の b), c) では /ár/, /ra/ のいずれをも「時制・相」標識と認定しその前後の母音 /a/ が活用類を指示すると考えることができる。しかし第2, 第3活用の動詞について同様な分割を比較してみれば、c) を採用すべきであることが明らかになるだろう。

a') com	é	mos	b') com	iér	a	mos	c') com	ié	ra	mos
com	é	is	com	iér	a	is	com	ié	ra	is
cóm	e	n	com	iér	a	n	com	ié	ra	n

b) と b') の /ár/, /iér/ は一形態素にまとめられるものの c), c') のどの環境にも同一音形で現われる /ra/ を設定する方が簡単である。さらに b), b') の /a/ は両者に共通しているから活用類別を示す機能があると見るのは困難であり、第2活用の特徴母音 /e/ と音韻的に関連づけることができないから不利である。同じ理由で amábamos, amaremos, amaríamos に関しても c), c') 型の分析が支持される。

7) 以上いくつかの方法を検討すれば、西語動詞屈折形態の適切な記述は一般的な条件の他、次

のような原則を満たすべきであると思われる。

1. 屈折範疇の境界は可能な限り音形と対応するように決定される。
2. 人称・数 形態素はすべての定形中に独立して存在する。
3. ある形式では別個の 2 形態素として現われる 2 種の屈折範疇が 1 形態素として実現される形式が存在する。¹⁸

上記 3 原則に合致するのは C2 のタイプで、Benot の分析もこれに近いが指摘されたような不備もあって、そのまま形態素分析に直すには不適當である。〔表 1〕の屈折語尾組織図は上の原則を考慮に入れて動詞構形成態素の境界を示したものである。

〔表 1〕

直・現	ám	∅	o	cóm	∅	o	súb	∅	o
	'	a	s		e	s	'	e	s
	'	a	∅		e	∅	'	e	∅
		á	mos		é	mos		í	mos
		á	is		é	is		∅	is
	'	a	n	'	e	n	'	e	n

直・過去完結相

am	é	∅	com	í	∅	sub	í	∅	
á	ste	∅		í	ste	∅	í	ste	∅
	∅	ó		i	ó		i	ó	
	á	mos		í	mos		í	mos	
á	ste	is		í	ste	is	í	ste	is
á	ro	n	cóm	ié	ro	n	ié	ro	n

接・現	ám	e	∅		a	∅	súb	a	∅
	'	e	s	'	a	s	'	a	s
	'	e	∅	'	a	∅	'	a	∅
		é	mos		á	mos		á	mos
		é	is		á	is		á	is
	'	e	n	'	a	n	'	a	n

直・過去不完結相

am	á	ba	∅	com	í	a	∅	sub	í	a	∅
	á	ba	s		í	a	s		í	a	s
	á	ba	∅		í	a	∅		í	a	∅
	á	ba	mos		í	a	mos		í	a	amos
	á	ba	is		í	a	is		í	a	is

		á	ba	n			í	a	n			í	a	n
未来	am	a	ré	∅	com	e	ré	∅	sub	i	ré	∅		
		a	rá	s		e	rá	s		i	rá	s		
		a	rá	∅		e	rá	∅		i	rá	∅		
		a	ré	mos		e	ré	mos		i	ré	mos		
		a	ré	is		e	ré	is		i	ré	is		
		a	rá	n		e	rá	n		i	rá	n		
条件法	am	a	ría	∅	com	e	ría	∅	sub	i	ría	∅		
		a	ría	s		e	ría	s		i	ría	s		
		a	ría	∅		e	ría	∅		i	ría	∅		
		a	ría	mos		e	ría	mos		i	ría	mos		
		a	ría	is		e	ría	is		i	ría	is		
		a	ría	n		e	ría	n		i	ría	n		
接・過去	am	á	ra	∅	com	ié	ra	∅	sub	ié	ra	∅		
		á	ra	s		ié	ra	s		ié	ra	s		
		á	ra	∅		ié	ra	∅		ié	ra	∅		
		á	ra	mos		ié	ra	mos		ié	ra	mos		
		á	ra	is		ié	ra	is		ié	ra	is		
		á	ra	n		ié	ra	n		ié	ra	n		
命令	ám	a	∅		cóm	e	∅		súb	e	∅			
		á	d			é	d			í	d			
不定形	am	á	ndo		com	ié	ndo		sub	ié	ndo			
		á	do			í	do			í	do			
		á	r			é	r			í	r			

直・現在，命令形は「テーマ・法・時制・相」及び「人称・数」形態素で形成されるのに対し，直・過非完，未来，条件法，接・過を組み立てているのは「テーマ・法」，「時制・相」，「人称・数」の3形態素である。また直・過完は1・単，3・単，1・複が2形態素，2・単，2・複，3・複は3形態素に分解される。上表では直・過完は1人称を除いて Benot の扱い方と異なっている。彼は「3・単」形を am-ó-∅, com-i-ó, sub-i-ó と解しているが，amó は am-∅-ó と見る方が「3・単」異形態 /o/ が第2，第3活用類と同じなので経済的である。直・過・非完結相，未来，条件法，接・過去形に関しては Stockwell-Bowen-Martin の語形表と細部を除いて一致する。〔表1〕に表わされた規則動詞の屈折語形の構造は以下のように記述することができる。

〔表2〕

不定形	語幹	テーマ・法母音 TV-M	<div>-r/ -do/ -ndo/</div>	人称・数標識 PN
定形			時制・相標識 Tns-Asp	
		テーマ・法・時制・相標識 TV-M~Tns-Asp		
	∅	1	2	3

形態素 異形態

分 布

1. TV-M

- {a} = /a, á/¹⁹⁾ { /á/ : -{BA}, -{RA}, -{RS} }
 { /a/ : その他の環境で }
- {e} = /e, í, ié/ { /e/ : -{RÉ}, -{ría}, -{r} }
 { /í/ : -{BA}, -{ste/}, -{do} }
 { /ié/ : その他 }
- {i} = /i, í, ié/ { /í/ : -{BA}, -{ste/}, -{do} }
 { /ié/ : -{ro/}, -{ra}, -{ndo} }
 { /i/ : その他 }

2. Tns-Asp

- 「直・過非完」 {BA} = /ba, a/ { /ba/ : {a} - }
 { /a/ : その他 }
- 「未来」 {RÉ} = /ré, rá/ { /ré/ : -{o}, -{mos}, -{IS} }
 { /rá/ : その他 }
- 「条件法」 {ría} = /ría/
- 「接・過」 {ra} = /ra/
- 「直・過完」 {RS} = /ste, ro/ { /ro/ : -{n} }
 { /ste/ : その他 }

1~2. TV-M~Tns-Asp

- {A} { 「直・現, 命令」 = /∅, a, á/ { /∅/ : -{o} }
 { /á/ : -{mos}, -{IS} }
 { /a/ : その他 }
 「接・現」 = /e, é/ { /é/ : -{mos}, -{IS} }
 { /e/ : その他 }
 「直・過完」 = /é, á, ∅/ { /é/ : {o} }
 { /á/ : -{mos} }
 { /∅/ : その他 }
 {E} { 「直・現, 命」 = /∅, e, é/ { /∅/ : -{o} }
 { /é/ : -{mos}, -{IS} }
 { /e/ : その他 }
 「接・現」 = /a, á/ { /á/ : -{mos}, -{IS} }
 { /a/ : その他 }
 「直・過完」 = /i, í/ { /í/ : -{ó} }
 { /í/ : その他 } }

$$\{I\} \left\{ \begin{array}{l} \text{「直・現, 命」} = / \emptyset, e \sim i /^{10)} \left\{ \begin{array}{l} / \emptyset / : - \{o\}, - /is/ \\ /i/ : - \{mos\}, - /d/ \\ /e/ : \text{その他} \end{array} \right. \\ \text{「接・現」} = /a, \acute{a}/ \left\{ \begin{array}{l} / \acute{a} / : - \{mos\} - \{IS\} \\ /a/ : \text{その他} \end{array} \right. \\ \text{「直・過完」} = /i, i/ \left\{ \begin{array}{l} /i/ : - \{ \acute{o} \} \\ /i/ : \text{その他} \end{array} \right. \end{array} \right.$$

3. PN

$$\begin{array}{ll} \text{「1・単」 } \{o\} = /o, \emptyset/ & \left\{ \begin{array}{l} /o/ : / \emptyset / - \\ / \emptyset / : \text{その他} \end{array} \right. & \text{「1・複」 } \{mos\} = /mos/ \\ \text{「2・単」 } \{s\} = /s, \emptyset/ & \left\{ \begin{array}{l} / \emptyset / : ste-, \text{「命令」} - \\ /s/ : \text{その他} \end{array} \right. & \text{「2・複」 } \{IS\} = /is, is, d/ \left\{ \begin{array}{l} /is/ : / \emptyset / - \\ /d/ : \text{「命令」} - \\ /is/ : \text{その他} \end{array} \right. \\ \text{「3・単」 } \{ \acute{o} \} = / \acute{o}, \emptyset/ & \left\{ \begin{array}{l} / \acute{o} / : / \emptyset / -, /i/ - \\ / \emptyset / : \text{その他} \end{array} \right. & \text{「3・複」 } \{n\} = /n/ \end{array}$$

4. 強勢

(1) 強勢は語尾 1, 2, 1~2, 3に無い時は語幹にある。

(2) 語幹が /i/ または /u/ で終るとき、強勢はその母音かそれより 1 つ前の音節にある。その他の場合、語幹の最終音節にある。

＊テーマ・法・時制・相⁸ 標識に関しては母音代表記号 V と、環境略記法を用いれば、さらに一般化された簡単な記述が可能である。1~2 は次のように書き換えられるだろう。

〔表 3〕

1 ~ 2 TV-M~Tns-Asp

分 布

$$\begin{array}{ll} \text{「直・現, 命」} & \left\{ \begin{array}{l} \{A\} = / \emptyset, a, \acute{a} / \\ \{E\} = / \emptyset, e, \acute{e} / \\ \{I\} = / \emptyset, e \sim i / \end{array} \right. \left\{ \begin{array}{l} / \acute{v} / : - \{mos\}, \{A\} \{IS\}, \{E\} \{IS\}, \{I\} /d/ \\ / \emptyset / : \{I\} /is/ \\ /v/ : \text{その他} \end{array} \right. \\ \text{「接・現」} & \left\{ \begin{array}{l} \{A\} = /e, \acute{e} / \\ \{E\}, \{I\} = /a, \acute{a} / \end{array} \right. \left\{ \begin{array}{l} / \acute{v} / : - \{mos\}, - \{IS\} \\ /v/ : \text{その他} \end{array} \right. \\ \text{「直・過完」} & \left\{ \begin{array}{l} \{A\} = / \acute{e}, \acute{a}, \emptyset / \\ \{E\}, \{I\} = /i, i/ \end{array} \right. \left\{ \begin{array}{l} / \acute{e} / : - \{o\} \\ / \acute{a} / : - \{mos\} \\ / \emptyset / : \text{その他} \\ /i/ : - \{ \acute{o} \} \\ /i/ : \text{その他} \end{array} \right. \end{array}$$

8) 形態素を設定しその配列を記述することにより, paradigm の表面に現われにくい動詞の内部構造を明らかにすることができる反面, 図表化された paradigm で明瞭に示される組織的な関係をわかりにくくしているのに気づく。〔表 3〕の書き換えでかなり改善されるとはいえ, なお一般化されるべき内容が残っているように思われる。例えば TV-M~Tns-Asp の形態素 {A} {E} {I} は「直・現」で, 異形態の分布においてだけでなく, 異形態の種類も平行的である。すなわ

ち上記形態素をそれぞれ $\{V_1\} \{V_2\} \{V_3\}$ とすれば, $\{V_n\} = \emptyset$, V_n, \dot{V}_n である。ここで $\{I\}$ の異形態とみなされていた $/e/$ は動詞屈折という局部体系だけでなく, 西語音韻全体を支配する制限から, その形態が決定されると考えた結果, 上のように簡約された表記になった。つまり $V_3 = \emptyset, i, i$ が表面下にある規則的な形式であって, $/e/$ は別の一般的規則によって i から形成されたとする。「接・現」についても, \emptyset に実現される環境を除けば $V_1 = V_2, V_{2,3} = V_1$ なる関係に注目して簡約化できそうである。また超分節音素の強勢は別に単語レベルの一般的ルールとして規定できるが, [表2, 3]の分析は個々の形態素の特徴としてとらえたため複雑性を増している。

具体的な例として「直・現」の *amo, como, abro* 3 形式の場合を考えてみよう。形態素分析で $\{A\}$ (又は $\{E\}, \{I\}$) が $/o/$ の前に位置すると \emptyset である² という 3 つの記述が, 下記の規則的な 3 形を仮定すれば $\{母音\}$ は $/o/$ の前で脱落する³ という 1 規則で表現される。しかし, もしこの規則より以前に例えば「過完」の *abrió, comió* の形が既に与えられて存在するならば, 上記の規則はこれらをも *abro, como* と変化させ正しい語形は得られないだろう。これを避けるために 2 つの方法が考えられる。一つは, $V \rightarrow \emptyset / \text{---} o$ (1)

が現在形のみにあてはまるという条件を指定することにより *abrió, comió* への適用を除外する方法である。他の方法は規則(1)が用いられる段階に *abrió, comió* が存在しないと仮定する。言い換えれば(1)の母音削除規則よりも後に順位づけられた別の規則でこれらの形式が導入されるとする。前者の解決法は複雑な制限条件を設けなければならないし, 他の規則にも同一の制限が繰り返されなければならない不経済も起りうる。後者によればこの種の制限は全く不要になるか, 最小限に抑えられる。ある規則の他の規則に対する順位が機械的に条件付けを行う機能を果す。つまりこのような順序づけられた規則の集合が, 表面に現われない一定の構造に順次働いて実際の動詞形式が導き出されると仮定することにより, 表面上の形態的不規則性が一般的な規則で説明されうること示している。また例えば不規則動詞形 *veo* の記述で「1・単」形態素 o の「直・現」での異形態 $/eo/$ を新たな特記条件と共に設ける煩わしさはなく, 単に *ver* は規則(1)が適用されない動詞であることを述べればよい。(1)は *ahora, cacao*, 名詞 *paseo, veraneo* の o の前の母音を削除してしまうかも知れない。そこで形態素(形式素)間の境界を条件として規則を正確にすると(2)になる。

$$V \rightarrow \emptyset / + \text{---} + o \quad (2)$$

さらに *amé, comí, abrí* などの「過完」形は人称語尾 i を想定し, *amai, comii, abrii* の最後から 2 番目の母音を削除するため(2)を拡大して

$$V \rightarrow \emptyset / + \text{---} + V \quad (3)$$

と修正すればこの規則は一層一般性をもつ。先に「直・過非完」形態素を BA_i として 2 異形態 $/ba/, /a/$ を認めた。新しい方式では基底にある形式として ba を定め, b が i の前で削除される規則(4)を加えることになるだろう。

$$b \rightarrow \emptyset / i + \text{---} \quad (4)$$

ただしこの規則は(3)の後に用いられるよう順序づける必要がある。 $com + i + ba$ に(4)を適用すれば $com - i - a$ になり, 次に(3)があれば *coma* を作ってしまうからである。

9) 以上のような方法を利用して西語動詞体系の根本的な規則性を説明する記述として〔I〕の規則集合がまず考えられる。これによって命令法を除くすべての動詞定形が生成されるだろう。ただし SUBJ は que 挿入変形規則で付加されるとする。また(3), (5)の一致規則の前段階に, (3)の場合には動詞の類標識としてテーマ母音の特徴素性が, (5)については主語となる NP に支配される範疇に対して人称素性が予め指定されていると仮定する。

〔I〕

1. $V \rightarrow V_{\text{stem}} + \text{affix}$
2. $\text{affix} \rightarrow \text{TV} + (\text{ri-Fut})\text{Tns-Asp} + \text{PN}$
3. $\text{TV} \rightarrow \begin{bmatrix} \text{TV}_1 \\ \text{TV}_2 \\ \text{TV}_3 \end{bmatrix} / \begin{bmatrix} +V, \text{stem 1} \\ +V, \text{stem 2} \\ +V, \text{stem 3} \end{bmatrix} \text{ ---}$
4. $\text{PN} \rightarrow (\text{Plur})\text{E}$
5. $\text{E} \rightarrow \begin{bmatrix} \text{E}_1 \\ \text{E}_2 \\ \text{E}_3 \end{bmatrix} / \begin{bmatrix} +\text{NP}, 1 \text{ pers} \\ +\text{NP}, 2 \text{ pers} \text{ ---} \\ +\text{NP}, 3 \text{ pers} \end{bmatrix} \text{ ---}$
6. $\text{Plur} \rightarrow \begin{bmatrix} \text{Pl}_1 \\ \text{Pl}_2 \\ \text{Pl}_3 \end{bmatrix} / \text{ --- } \begin{bmatrix} \text{E}_1 \\ \text{E}_2 \\ \text{E}_3 \end{bmatrix}$
7. $\text{Tns-Asp} \rightarrow \begin{cases} \text{--- Perf} \\ \text{Past} \\ \text{--- Non-P} \end{cases}$
8. $\begin{bmatrix} \text{TV}_1 \\ \text{TV}_2 \\ \text{TV}_3 \end{bmatrix} \rightarrow \begin{bmatrix} \text{TV}_2 \\ \text{TV}_1 \\ \text{TV}_1 \end{bmatrix} \text{ --- Non-P} + \text{SUBJ}$
9. $\text{TV}_2 \rightarrow \text{TV}_3 / \text{ --- } \begin{cases} \text{Perf} \\ \text{Past}(+\text{SUBJ}) \end{cases}$
10. $\begin{bmatrix} \text{TV}_1 \\ \text{TV}_2 \\ \text{TV}_3 \end{bmatrix} \rightarrow \begin{bmatrix} \text{a} \\ \text{e} \\ \text{i} \end{bmatrix}$
11. $\text{E}_1 \rightarrow \begin{cases} \text{mos/Pl}_1 \text{ ---} \\ \text{i/Perf} \text{ ---} \end{cases}$
12. $\text{E}_3 \rightarrow \text{o/Perf} \text{ ---}$
13. $\text{Perf} \rightarrow \begin{cases} \text{ro/---Pl}_3 \text{E}_3 \\ \text{ste/---(Pl}_2\text{)E}_2 \\ \emptyset \end{cases}$
14. $\text{i} \rightarrow \text{e/a} + \text{---} \#$
15. $\text{Non-P} \rightarrow \emptyset / \text{ri} \cdot \text{Fut} \text{ ---}$

$$16. \text{ Fut} \rightarrow \left\{ \begin{array}{l} a / \text{---} \{ (\text{Pl}_3) \text{ E}_3 \} \\ \emptyset / \text{---} \text{Past} \\ e \end{array} \right\}$$

$$17. \text{ V} \rightarrow [+ \text{stress}] / \left\{ \begin{array}{l} \text{V} \text{---} \# \\ \text{ri} \text{---} \end{array} \right\}$$

$$18. a \rightarrow \emptyset / + \text{---} + o$$

$$19. \text{ E}_1 \rightarrow o / \text{Non-P} \text{---}$$

$$20. \text{ Non-P} (+ \text{SUBJ}) \rightarrow \emptyset$$

$$21. \text{ V} \rightarrow \emptyset / \text{---} \left\{ \begin{array}{l} \left[\begin{array}{c} \text{V} \\ - \text{stress} \end{array} \right] \\ i \\ e \\ a \end{array} \right\}$$

$$22. \text{ Past} \rightarrow \left\{ \begin{array}{l} ra / \text{---} + \text{SUBJ} \\ ba \end{array} \right\}$$

$$23. \text{ E}_3 \rightarrow n / \text{Pl}_3 \text{---}$$

$$24. \emptyset \rightarrow e / i + \text{---} + r \left\{ \begin{array}{l} \left[\begin{array}{c} a \\ - \text{stress} \end{array} \right] \\ o \end{array} \right\}$$

$$25. \text{ E}_1 \rightarrow \emptyset$$

$$26. \text{ E}_3 \rightarrow \emptyset$$

$$27. \text{ E}_2 \rightarrow \left\{ \begin{array}{l} \emptyset / \text{ste} \text{---} \\ s \end{array} \right\}$$

$$28. \text{ Pl}_2 \rightarrow i$$

$$29. \text{ Pl}_1 \rightarrow \emptyset$$

$$30. \text{ Pl}_3 \rightarrow \emptyset$$

$$31. \left[\begin{array}{c} \text{V} \\ - \text{stress} \end{array} \right] \rightarrow [+ \text{stress}] / \text{---} \left(\begin{array}{c} ra \\ ba \\ ste \end{array} \right) \text{Co} \left[\begin{array}{c} \text{V} \\ - \text{stress} \end{array} \right] \text{Co} \#$$

$$32. b \rightarrow \emptyset / i + \text{---}$$

$$33. \left[\begin{array}{c} i \\ - \text{stress} \end{array} \right] \rightarrow \left\{ \begin{array}{l} e / C \text{---} \text{Co} \# \\ \emptyset / i \text{---} \end{array} \right\}$$

展開例 : comíamos

$$\text{V} \rightarrow \text{com} + \text{affix} \quad (1)$$

$$\text{com} + \text{TV} + \text{Tns-Asp} + \text{PN} \quad (2)$$

$$\text{com} + \text{TV}_2 + \text{Tns-Asp} + \text{PN} \quad (3)$$

com	+	TV ₂	+	Tns-Asp	+	Plur E	(4)
com	+	TV ₂	+	Tns-Asp	+	Plur E ₁	(5)
com	+	TV ₂	+	Tns-Asp	+	Pl ₁ E ₁	(6)
com	+	TV ₂	+	Past	+	Pl ₁ E ₁	(7)
com	+	TV ₃	+	Past	+	Pl ₁ E ₁	(9)
com	+	i	+	Past	+	Pl ₁ E ₁	(10)
com	+	i	+	Past	+	Pl ₁ mos	(11)
com	+	i	+	ba	+	Pl ₁ mos	(22)
com	+	i	+	ba	+	∅ mos	(29)
com	+	i	+	ba	+	mos	(31)
com	+	i	+	a	+	mos	(32)

〔I〕の文法では未来形と条件法は Tns-Asp の前の ri-Fut を選択する点で他の時制と区別され、さらに Fut の書き換えで分化されて前者は Tns-Asp の Non-P、後者は Past と結合して展開されて行く。この2時制は他の法・時制に比べ異質な語尾をとり、特に未来形の強勢位置が〔31〕の主要強勢規則で規定されない例外的パタンを示すので、特別な扱いを受けなければならないとされてきた。この点では Stockwell-Bowen-Martin²⁰ により示唆され、J. Harris が再提案した²¹、不定詞と助動詞 haber とを関連づけ変形により説明する考え方が有力である。しかし若干の疑問点もある。J. Harris の拠り所とした6点²²のうち第1の haber「直・現」形と未来語尾の同一性は、カスティリャ方言に関して、habéis/-éis の不一致を考慮すれば絶対的でない。第2に挙げている補完式 suppletive 動詞形における不定詞と未来幹の同一性は、「未来」形式素（それを仮定した場合）の規則性に比較すれば非常に周辺的な問題になるだろう。また最終音節アクセントの問題も、「過完」amó, comió などにも見られ、動詞形式としては変則的でないとも考えることもできる。未来形と条件法をどのように処理すべきかについては未だ多くの問題が残されている。しかし、〔I〕で示されたように〔10〕の Fut 導入規則を別にすれば、若干の環境条件の修正のみで未来、条件法両形とも他の時制と全く同じように動詞屈折のレベルで記述する方法があることは確かである。なお規則〔21〕は例外素性〔-rule n〕を用いて、2規則に分割した方が明確になるかもしれない。

$$21. i \rightarrow [-\text{next rule}] / \text{---} + \left[\begin{smallmatrix} 0 \\ +\text{stress} \end{smallmatrix} \right]$$

$$21a. V \rightarrow \emptyset / \text{---} + V$$

10) さて〔I〕では「人称・数」を句構造規則で書き換える方式をとり、人称語尾 E と複数標識 Pl を分離して、それぞれ E₁ E₂ E₃, Pl₁ Pl₂ Pl₃ と下位範疇化したのが、統語素性を用いて、3つの人称素性と「複数」素性の複号記号で表わすこともできる。素性分析を利用することは E₁, E₃, Pl₁, Pl₃ などが音声的に具現されないという事実を示す規則が不要になる点で有利である。次に未

来、条件法を生成しない規則の体系を考えると〔I〕が部分的に単純化されるのに気づく。すなわち、両時制・法を除けば活用類の3分割はむしろ余剰的で、〔+1 conj〕と〔-1 conj〕に分けた方が合理的である。第2・3活用動詞はテーマ母音を i としても「直・現」の abres, abre, abren などが abris, abri, abrin から〔I〕③で導出されるから、区分の残るのは abrimos, comemos; abris, coméis のケースだけである。従って第3活用類を〔-1 conj〕の不規則形として lexicon にこれらの動詞の固有素性〔+irre〕を追加指定することで、テーマの扱いが簡単になる。次の〔II〕は以上のことがらを考慮したものである。

〔II〕

1. $V \rightarrow V\text{stem} + \text{affix}$
2. $V\text{stem} \rightarrow [+V, \pm 1 \text{ conj}]$
3. $\text{affix} \rightarrow TV + T\text{ns-Asp} + PN$
4. $TV \rightarrow [\alpha \ 1 \text{ conj}] / [+V, \alpha \ 1 \text{ conj}] \text{---}$
5. $T\text{ns-Asp} \rightarrow \begin{cases} \text{Perf} \\ \text{Past} \\ \text{Non-P} \end{cases}$
6. $PN \rightarrow \begin{pmatrix} n \text{ pers} \\ \alpha \text{ plu} \end{pmatrix} / \begin{pmatrix} +NP \\ n \text{ pers} \\ \alpha \text{ plu} \end{pmatrix} \text{-----}$
7. $[\alpha \ 1 \text{ conj}] \rightarrow [-\alpha \ 1 \text{ conj}] / \text{---Non-P} + \text{SUBJ}$
8. $[+1 \text{ conj}] \rightarrow a$
9. $[-1 \text{ conj}] \rightarrow i$
10. $i \rightarrow e / \left(\begin{matrix} \text{---} \\ <+irre> \end{matrix} \right) + \left\{ \begin{matrix} \text{Non-P} + \text{SUBJ} \\ <\text{Non-P}> \end{matrix} \right\} + \begin{pmatrix} +\text{plu} \\ \begin{matrix} 1 \text{ pers} \\ 2 \text{ pers} \end{matrix} \end{pmatrix}$
11. $[1 \text{ pers}] \rightarrow \begin{cases} \text{mos} / \begin{pmatrix} \text{---} \\ +\text{plu} \end{pmatrix} \\ i / \text{Perf} + \begin{pmatrix} \text{---} \\ -\text{plu} \end{pmatrix} \end{cases}$
12. $[3 \text{ pers}] \rightarrow o / \text{Perf} + \begin{pmatrix} \text{---} \\ -\text{plu} \end{pmatrix}$
13. $\text{Perf} \rightarrow \begin{cases} \text{ro} / \begin{pmatrix} 3 \text{ pers} \\ +\text{plu} \end{pmatrix} \\ \text{ste} / \begin{pmatrix} \text{---} \\ 2 \text{ pers} \end{pmatrix} \\ \emptyset \end{cases}$
14. $i \rightarrow e / a \text{---}$
15. $V \rightarrow [+stress] / V \text{---}\#$
16. $a \rightarrow \emptyset / + \text{---} + o$
17. $[1 \text{ pers}] \rightarrow o / \text{Non-P} + \begin{pmatrix} \text{---} \\ -\text{plu} \end{pmatrix}$
18. $\text{Non-P} (+\text{SUBJ}) \rightarrow \emptyset$

- $$\begin{aligned}
19. V \rightarrow \emptyset / \text{---} & \left\{ \left[\begin{array}{c} \text{V} \\ \text{---stress} \\ i \\ e \end{array} \right] \right\} \\
20. \text{Past} + \langle \text{SUBJ} \rangle \rightarrow & \left\{ \begin{array}{c} \langle \text{ra} \rangle \\ \text{ba} \end{array} \right\} \\
21. \langle 3 \text{ pers} \rangle \rightarrow n / & \left[\begin{array}{c} \text{---} \\ +\text{plu} \end{array} \right] \\
22. \emptyset \rightarrow e/i + \text{---} + & \left\{ \begin{array}{c} \text{ra} \\ \text{ro} \end{array} \right\} \\
23. \langle 2 \text{ pers} \rangle \rightarrow \alpha \langle i \rangle s / & \left[\begin{array}{c} \text{---} \\ \alpha \text{ plu} \end{array} \right] \\
24. s \rightarrow \emptyset / +\text{ste} + \text{---} & \\
25. V \rightarrow [+stress] / \text{---} & \left(\begin{array}{c} \text{ra} \\ \text{ba} \\ \text{ste} \end{array} \right) \text{Co} \left[\begin{array}{c} \text{V} \\ \text{---stress} \end{array} \right] \text{Co} \# \\
26. b \rightarrow \emptyset / i + \text{---} & \\
27. \left[\begin{array}{c} i \\ \text{---stress} \end{array} \right] \rightarrow & \left\{ \begin{array}{c} e/C \text{---Co} \# \\ \emptyset / i \text{---} \end{array} \right\}
\end{aligned}$$

テーマ母音を複合記号に変える〔II〕(4)は変数 α を用いた結果, 〔I〕(3)に比べて簡潔になったし, また「接・現」でのテーマ母音転換も(7) $[\alpha 1 \text{ conj}] \rightarrow [-\alpha 1 \text{ conj}]$ でもって $a \rightarrow e; i, e \rightarrow a$ を同時に規定できる。「2人称」は単複とも㉔で一括して与えられるが, 単数の「過完」は例外的に \emptyset であるため別に㉔を加えなければならない。

11) 〔I〕及び〔II〕の規則集合は部分体系としての動詞の屈折構造を明らかにする目的のみを考慮して組み立てられた文法の断片である。それはすべての規則動詞の屈折を説明するという意味では十分な一般性をもつものである。しかし屈折は文法(全体系)の局部事象ではあるが, 屈折形の生成過程は文法全体にわたる以上, 必然的に文法の枠組全体と関連する。一般的に文法が統語部門, 音形部門, 意味部門により組織されるという考えに立てば, 屈折形態論は特に前の2部門に係わっている。そこでまず統語部門における動詞の出現とその展開を考えてみよう。基底部の文脈自由型分枝規則によってVが現われ, 恐らく今論じている問題に直接関係のない他の範疇とともに句構造標識では大範疇VPに支配されている。下位範疇化規則によってVは文脈素性の集合である複合記号に分析されて, $[+V, \text{---}]$ のような形で表わされる。次にセグメント構造規則 Segment Structure Rules²³ が「時制・相」素性を付加する。

$[+V] \rightarrow [\pm \text{past}], [+past] \rightarrow [\pm \text{perf}], [-past] \rightarrow [\pm \text{pres}], [-pres] \rightarrow [\pm \text{fut}]$

さらに語彙規則により lexicon から語彙形式素が導き入れられ, その際 $[+V]$ にはテーマ母音を表わす類標識素性 $[\pm 1 \text{ conj}, \pm 2 \text{ conj}]$ が付与される。以上の基底部で生成された深層構造で動詞は例えば次のような指定を受けた統語素性の集合として現われるであろう。変形部門の動詞

一致変形規則が主語の N から関与的な素性 [n pers] [±plu] をそのまま動詞に写せば、屈折に必要な基本的情報はすべて動詞に付与されたことになる。これらの屈折素性は調整規則 Readjustment rules²⁴により、ある種の素性の置換、導入が行なわれ、またそれらの素性に対応する文法形式素が付与されて、音形部門の入力となるであろう。あるいはこれらの規則を前記一致変形に続く動詞接尾辞変形とみなして変形部門の一部と考える方法もある。

$$\begin{pmatrix} +V \\ +past \\ -perf \\ -1 conj \\ +2 conj \end{pmatrix}$$

12) このような概略的な文法の組み立てを仮定した上で再び規則体系 [I], [II] を検討すればいくつかが問題が出てくる。特に簡約化のために規則の順次性を最も効果的に利用したので、調整規則のあるものが音形規則の中間に出現しているのを修正しなければならないだろう。規則を階層化するには、新たな環境制限条件を設けたり、文法形式素の形態を変更しなければならないかも知れない。[II] で試みたテーマ母音の素性表記 [±1 conj で表わす] は未来、条件法を生成する文法を目ざすために不適当なので、改められよう。[I], [II] では構成素として分析されていた「時制・相」も深層構造においてやはり素性の指定で表わされるとすれば、屈折範疇は統一的になる。上に述べた諸点を含んで整理すると次のようになる。

(III)

調整規則 (i)

1. $\emptyset \rightarrow \begin{pmatrix} \alpha 1 conj \\ \beta 2 conj \end{pmatrix} / \begin{pmatrix} \alpha 1 conj \\ \beta 2 conj \end{pmatrix} + \text{---} \# \} v$
2. $\emptyset \rightarrow \begin{pmatrix} \alpha past \\ \beta perf \\ r pres \\ \delta fut \end{pmatrix} / \begin{pmatrix} \alpha past \\ \beta perf \\ r pres \\ \delta fut \end{pmatrix} + \text{-----} \# \} v$
3. $\emptyset \rightarrow \begin{pmatrix} n pers \\ \alpha plu \end{pmatrix} / \begin{pmatrix} n pers \\ \alpha plu \end{pmatrix} \text{---} + \text{---} \# \} v$
4. $\begin{pmatrix} \alpha 1 conj \\ \beta 2 conj \end{pmatrix} \rightarrow \begin{pmatrix} -\alpha 1 conj \\ -\beta 2 conj \end{pmatrix} / \text{---} [+pres] + [+subj]$
5. $[+2 conj] \rightarrow [-2 conj] / \text{---} [+past]$

調整規則 (ii)

1. $\begin{pmatrix} [+1 conj] \\ [+2 conj] \\ [-1 conj] \\ [-2 conj] \\ 1 \end{pmatrix} \rightarrow \begin{pmatrix} a \\ e \\ i \\ 1 \end{pmatrix}_1$
2. $[-perf] \rightarrow \begin{pmatrix} ra / + [+subj] \\ ba \end{pmatrix}$
3. $V \rightarrow [+stress] / \text{---} [-pres]$

4. $\{+fut\} \rightarrow \begin{cases} ra/ \text{---} + \{ \{3 \text{ pers} \} \} \\ re \quad \{ \{2 \text{ pers} \} \} \\ \quad \{ \{ -plu \} \} \end{cases}$
5. $\{ -fut \} \rightarrow ria$
6. $\{ +perf \} \rightarrow \begin{cases} ste/ \text{---} + \{ 2 \text{ pers} \} \\ ro/ \text{---} + \{ 3 \text{ pers} \} \\ \quad \{ +plu \} \end{cases}$
7. $\{ 1 \text{ pers} \} \rightarrow \begin{cases} \left\{ \begin{smallmatrix} o \\ i \\ 1 \end{smallmatrix} \right\}_1 / \left\{ \begin{smallmatrix} +pres \\ +perf \end{smallmatrix} \right\}_1 + \left\{ \text{---} \\ -plu \end{smallmatrix} \right\}_1 \\ mos/ \left\{ \text{---} \\ +plu \end{smallmatrix} \right\}_1 \end{cases}$
8. $\{ 2 \text{ pers} \} \rightarrow \alpha < i > s / \left\{ \text{---} \\ \alpha \text{ plu} \right\}$
9. $\{ 3 \text{ pers} \} \rightarrow \left\{ \begin{smallmatrix} <u> \\ n \end{smallmatrix} \right\}_1 / < \{ +perf \} > + \left\{ \begin{smallmatrix} \text{---} \\ -plu \end{smallmatrix} \right\}_1 + \left\{ \begin{smallmatrix} \text{---} \\ +plu \end{smallmatrix} \right\}_1 \right\}$

音形規則

1. $\left\{ \begin{smallmatrix} V \\ +stress \\ 1 \end{smallmatrix} \right\} r \begin{smallmatrix} V \\ 2 \end{smallmatrix} \rightarrow \left\{ \begin{smallmatrix} -stress \\ 1 \end{smallmatrix} \right\} r \left\{ \begin{smallmatrix} +stress \\ 2 \end{smallmatrix} \right\}$
2. $s \rightarrow \emptyset / +ste + \text{---}$
3. $\left\{ \begin{smallmatrix} u \\ i \end{smallmatrix} \right\} \rightarrow \{ +stress \} / \left\{ \begin{smallmatrix} a \text{---} \# \\ i \text{---} \end{smallmatrix} \right\}$
4. $\left\{ \begin{smallmatrix} i \\ +stress \end{smallmatrix} \right\} \rightarrow e/a + \text{---}$
5. $\left\{ \begin{smallmatrix} i \\ e \end{smallmatrix} \right\} \rightarrow \emptyset / \text{---} \left\{ \begin{smallmatrix} o \\ i \\ +stress \end{smallmatrix} \right\}$
6. $a \rightarrow \emptyset / + \text{---} + \left\{ \begin{smallmatrix} o \\ e \\ u \\ +stress \end{smallmatrix} \right\}$
7. $\emptyset \rightarrow e/i + \text{---} + r \left\{ \begin{smallmatrix} a \\ -stress \\ o \end{smallmatrix} \right\}$
8. $\left\{ \begin{smallmatrix} u \\ +stress \end{smallmatrix} \right\} \rightarrow o$
9. $\check{V} \rightarrow \{ +stress \} / \check{V}Co - \left(\begin{smallmatrix} ra \\ ba \\ ste \end{smallmatrix} \right) Co \check{V} Co \#$
10. $b \rightarrow \emptyset / i + \text{---}$
11. $\left\{ \begin{smallmatrix} i \\ -stress \end{smallmatrix} \right\} \rightarrow e/C - Co \#$

調整規則 (i) は動詞接尾辞変形規則 etc. として変形部門で扱われるとも解釈できる規則である。音形規則 (2) $s \rightarrow \emptyset / +ste + \text{---}$ が援用されるのは局部的で、〔II〕の場合と同様、代案として(2)を削除して調整規則(ii) (8)を修正する方法がある。

$$[2 \text{ pers}] \rightarrow \left\{ \begin{array}{l} [-\text{next rule}] / +ste + \left[\overline{-\text{plu}} \right] \\ \alpha < i > s / \left[\overline{\alpha \text{ plu}} \right] \end{array} \right\}$$

13) 前節では主に統語部門の組織における動詞の位置づけを考えたが、次に音形部門の一般的性格が動詞語形の生成とどのようにかわるかという重要な点を見る必要がある。音形部門は文の表面構造中の文法形式素を特定の音形に移しかえる調整規則とそこで現われる音形表示を音声表示に移す音形規則が中心になるとされている。また〔III〕の規則体系で便宜的に正書法 alfabeto で表記されている音形は実際は音形素性の行列で表示される。Lexicon から引き出され語彙表示²⁵ で現われている語彙形式素も、音形部門の規則で挿入されるセグメントも余剰性を含まないから、それを補い非弁別的素性を指定する音形余剰規則が存在する。また根底にある音形表示には示されていない超分節的素性を導入し、修正するのもこの部門においてである。いずれにせよ音形規則は一般的に適用されるべきものであるから動詞屈折の音形部分は西語音形体系全体を組み立てる作業に大きく依存するし、同時に前者も後者を決定する一要素である。〔III〕の音形規則は少数を除き動詞屈折語尾のみに、あるいはさらに限定された部分にあてはまるだけで、一般性に乏しい。西語音形部門の一部は J. W. Harris²⁶ により詳しく論じられているが、彼が提案しているいくつかの点、例えば2重母音化素性+Dの採用、テーマ母音の扱い方、接続法と complementizer を含む法・時制・相の総合的素性化²⁷ をも取り入れて〔III〕に代る新しい規則体系を検討すれば以下ようになる。Chomsky, Halle (1968) の修正案²⁸ による音形素性を用いるが、動詞屈折の音形を論ずるのに最も関与する母音組織については右下のような素性構成で示されるものとする。

根底にある音形表記で半母音（半子音）y, wは存在せず、		a	e	o	u	i
これらはすべて i または u であると仮定し、余剰規則 [-	vocalic	+	+	+	+	+
cons] → [+voc] が設けられるものとする。非常に一般的な、	consonantal	-	-	-	-	-
それ故音形規則の最後部に置かれた規則で [-voc] になる	high	-	-	-	+	+
場合が規定され、glides が導入されるであろう。なお法・時	back	+	-	+	+	-
制・相は次の素性分析を与えられている。	low	+	-	-	-	-

[+V] → [±finite], [+finite] → [±indicative], [+indicative] → [±past], [+indicative, +past] → [±perf], [-perf] → [±fut]
 [-indicative] → [±imperative], [-imperative] → [±past], [-finite] → [±participle]
 [+participle] → [±past]

Alfabeto の大文字は+Dの素性を含むことを示す。例えば I は i, +D である。

〔IV〕 調整規則

1. $\emptyset \rightarrow \left\{ \begin{array}{l} a/[1 \text{ conj}] \\ e/[2 \text{ conj}] \\ i/[3 \text{ conj}] \end{array} \right\} + \text{---} \# \text{ v}$
2. $\emptyset \rightarrow \left[\begin{array}{l} \alpha \text{ plu} \\ \text{n pers} \end{array} \right] / \left[\begin{array}{l} \alpha \text{ plu} \\ \text{n pers} \end{array} \right] \text{---} + \text{---} \# \text{ v}$
3. $\emptyset \rightarrow \left[\begin{array}{l} \alpha \text{ finite} \\ \beta \text{ indicative} \\ \gamma \text{ past} \\ \delta \text{ perfective} \\ \epsilon \text{ future} \\ \zeta \text{ imperative} \\ \eta \text{ participle} \end{array} \right] / \left[\begin{array}{l} \alpha \text{ finite} \\ \beta \text{ indicative} \\ \gamma \text{ past} \\ \delta \text{ perfective} \\ \epsilon \text{ future} \\ \zeta \text{ imperative} \\ \eta \text{ participle} \end{array} \right] \text{---} + \text{---} \# \text{ v}$
4. $\left[\begin{array}{c} \text{V} \\ \text{---low} \end{array} \right] \rightarrow [+high] / \text{---} [+past]$
5. $[+past, -perf] \rightarrow \text{ba}$
6. $[+past, +perf] \rightarrow \left\{ \begin{array}{l} \text{ste} / \text{---} [2 \text{ pers}] \\ \text{ro} / \text{---} [3 \text{ pers}, +\text{plu}] \end{array} \right\}$
7. $[+past, -ind] \rightarrow \text{ra}$
8. $\text{V} \rightarrow [+stress] / \text{---} [+ind, -past, +fut]$
9. $[+ind, -past, +fut] \rightarrow \left\{ \begin{array}{l} \text{ra} / \text{---} \left\{ \begin{array}{l} [3 \text{ pers}] \\ [2 \text{ pers}, -\text{plu}] \end{array} \right\} \\ \text{re} \end{array} \right\}$
10. $[-perf, +fut] \rightarrow \text{riba}$
11. $[-past, -ind] \rightarrow \left\{ \begin{array}{l} e / [1 \text{ conj}] \\ a / \left\{ \begin{array}{l} [2 \text{ conj}] \\ [3 \text{ conj}] \end{array} \right\} \end{array} \right\} \text{---}$
12. $[1 \text{ pers}] \rightarrow \left\{ \begin{array}{l} \left\{ \begin{array}{l} \text{o} \\ \text{I} \\ \text{---} \end{array} \right\}_1 / \left\{ \begin{array}{l} [-past] \\ [-fut] \\ [+ind] \end{array} \right\}_1 + \left\{ \begin{array}{l} \text{---} \\ [-\text{plu}] \end{array} \right\}_1 \\ \text{mos} / \left\{ \begin{array}{l} \text{---} \\ [+plu] \end{array} \right\}_1 \end{array} \right\}$
13. $[2 \text{ pers}] \rightarrow \left\{ \begin{array}{l} [-\text{next rule}] / +\text{ste} + \left\{ \begin{array}{l} \text{---} \\ [-\text{plu}] \end{array} \right\}_1 \\ \alpha < i > \text{s} / \left\{ \begin{array}{l} \text{---} \\ \alpha \text{ plu} \end{array} \right\}_1 \end{array} \right\}$
14. $[3 \text{ pers}] \rightarrow \left\{ \begin{array}{l} \left\{ \begin{array}{l} < \text{U} > \\ \text{---} \\ \text{n} \end{array} \right\}_1 / < [+perf] > + \left\{ \begin{array}{l} \text{---} \\ [-\text{plu}] \end{array} \right\}_1 \\ \left\{ \begin{array}{l} \text{---} \\ [+plu] \end{array} \right\}_1 \end{array} \right\}$
15. $[-fin, -part] \rightarrow \text{rE}$
16. $[+part, -past] \rightarrow \text{ndo}$

17. [+part, +past]→do

音形規則

1. $V \rightarrow \emptyset / + \text{---} + \left\{ \begin{smallmatrix} V \\ -D \end{smallmatrix} \right\}$
2. $+ \left\{ \begin{smallmatrix} V \\ \text{stress} \end{smallmatrix} \right\} \begin{smallmatrix} rV \\ 2 \end{smallmatrix} \rightarrow \left\{ \begin{smallmatrix} -\text{stress} \\ 1 \end{smallmatrix} \right\} r \left\{ \begin{smallmatrix} +\text{stress} \\ 2 \end{smallmatrix} \right\}$
3. $\check{V} \rightarrow [+stress] / \text{---} \left(\left\{ \begin{smallmatrix} ba \\ ra \\ ste \end{smallmatrix} \right\} \right) Co \check{V} Co \#$
4. $b \rightarrow \emptyset / i + \text{---}$
5. $\left\{ \begin{smallmatrix} V \\ +low \end{smallmatrix} \right\} \rightarrow \left\{ \begin{smallmatrix} -low \\ \alpha \text{ back} \end{smallmatrix} \right\} / \text{---} \left\{ \begin{smallmatrix} V \\ +high \\ \alpha \text{ back} \end{smallmatrix} \right\} \#$
6. $\left\{ \begin{smallmatrix} e \\ +D \end{smallmatrix} \right\} \rightarrow \emptyset / Vr \text{---} \#$
7. $\left\{ \begin{smallmatrix} V \\ -\text{stress} \\ +high \\ \alpha \text{ back} \end{smallmatrix} \right\} \rightarrow \emptyset / \left\{ \begin{smallmatrix} V \\ -low \\ \alpha \text{ back} \\ < -high > \end{smallmatrix} \right\} \text{---} < \# >$
8. $\left\{ \begin{smallmatrix} V \\ +\text{stress} \end{smallmatrix} \right\} \rightarrow \left\{ \begin{smallmatrix} -high \\ +D \end{smallmatrix} \right\} / \text{---} + \left\{ \begin{smallmatrix} ndo \\ rV \end{smallmatrix} \right\}$
9. $\acute{E} \rightarrow i\acute{e}$
10. $\left\{ \begin{smallmatrix} V \\ +high \\ +\text{stress} \end{smallmatrix} \right\} \begin{smallmatrix} \left\{ \begin{smallmatrix} V \\ +high \end{smallmatrix} \right\} \\ 2 \end{smallmatrix} \rightarrow \left\{ \begin{smallmatrix} -\text{stress} \\ 1 \end{smallmatrix} \right\} \left\{ \begin{smallmatrix} +\text{stress} \\ 2 \end{smallmatrix} \right\}$
11. $V \rightarrow [-high] / \left\{ \begin{smallmatrix} C \left\{ \begin{smallmatrix} \text{---} \\ -\text{stress} \end{smallmatrix} \right\} Co \# \\ \left\{ \begin{smallmatrix} +D \\ +back \end{smallmatrix} \right\} \end{smallmatrix} \right\}$

14) 2重母音化素性+Dの仮定は〔IV〕にどんな効果をもたらしただろうか。〔I〕～〔III〕の体系を導き出す際、過去完結相の母音脱落を説明しようとすれば常に現在形 -áis, -éis 語尾との関連で制約条件を設けなければならなかったが、「2・複」として Is を仮定すれば、〔IV〕音形規則(1)を作ることが出来るし、これは同時に、am+a+o, com+e+o etc, のテーマ母音も消去する。さらに過去完結相の「3・単」は+DのUを与えられているから Comi U, abri U は(1)を適用されないで済む。〔III〕の(3), (4), (5), (6), (8)は大幅に変更されたが、これらの働きは〔IV〕(5), (7), (10), (11)が受けもつ。例えば amo, abris, amé, amó, comé, abrió 6形式の展開を〔III〕〔IV〕で比較すれば次の通りである。

適用規則	amao	abriis	amai	amau	comii	abriu
(3)		abriís	amaí	amaú	comií	abriú
(4)			amaé			

	(5)	abrís		comí		
〔III〕	(6)	amo	amé	amú		
	(8)			amó		abrió
	(9)	ámo				
		amao	abriIs	amaI	amaU	comiI
	(1)	amo				
	(3)	ámo	abriIs	amáI	amáU	comiI
〔IV〕	(5)			améI	amóU	
	(7)		abrís	amé	amó	comí
	(10)					abriŨ
	(11)					abrió

代表的な上の6形式に見られるように、必要な規則の数及び段階数は〔III〕〔IV〕も殆んど同じである。しかし個々の規則の内容、その一般性を問題にすれば後者が優れていると思われる。強勢は〔III〕では「直・過完」と「現在」の限定された範囲にのみ有効な規則(3)と主要規則(9)で与えられるのに対し、〔IV〕は(3)の主要規則だけで規定している。

前に述べた表記上のいくつかの根本的な相違のほか、〔IV〕には〔III〕に対する代案が示されている。〔III〕で〔-pres〕として表わされる未来・条件法両形に対してそのテーマ母音上に強勢が付与されていたが、〔IV〕では〔+ind, -past, +fut〕つまり「未来」にのみアクセントが予め与えられる。従って強勢移動規則〔IV〕(2)は未来形だけを対象とし *amaríamos*, *amaríais* の不規則強勢位置は、*riba* を「条件法」形式素に指定し、「直・過非完」の *ba* と同様に、*b* 削除規則の前でこれに主要強勢規則を適用することにより正しく決定される。この方式で〔IV〕(3)は〔III〕(9)に比べ制限条件が一つ節約された。最後に〔IV〕の音形規則は動詞形式の最終的な音声表記を与えるものでないことを確認しなければならない。(12)以降に現われ西語音形体系が規定する、より一般的

な音形規則が順次適用されなければならない。例えばそれらの中には13)節で示唆した $\left(\begin{array}{l} -\text{cons} \\ +\text{high} \\ -\text{stress} \end{array} \right)$ $\rightarrow [-\text{voc}) / \left\{ \begin{array}{l} \text{---V} \\ \text{V---} \end{array} \right\}$ のような規則があって *abrió* の [ió] を [jó] に変えるだろう。また「過・非完」の [-ba-], や過去分詞 [-do-] をそれぞれ [-βa-], [-ðo-] にする規則が存在する筈である。

お わ り に

西語では動詞の形態的過程の中心をなすのは接尾辞である。前半において paradigm を分析して屈折語尾の構造を調べた。屈折接辞に含まれるいくつかの異った文法的意味を、それを担う形態的単位に割り当てて分類する試みの中で、屈折の大部分を一連のこれらの単位の連鎖として記述することはできるが、他の部分は言語形式としてきわめて普遍的なものであるにもかかわらず同様な分析を困難にしていることが明らかになった。この異質な部分のために記述の統一性がある程度犠牲にされるのは避けられなかった。

後半は生成文法の考え方に立って、規則動詞のすべての適格屈折形を派生する規則体系を組み立てようとする試みである。屈折形態論という限定された下位組織の中で、かなりうまく行く文法断片の定式化として、まず〔Ⅰ〕が導き出された。一方、文法の特定部分体系の規則は同時に文法体系全体を構成する規則の一部とならねばならないという要請がある。〔Ⅱ〕、〔Ⅲ〕、〔Ⅳ〕の体系はこの方向で考え出された。しかし統語論にせよ音形論にせよ、西語文法で一般生成文法理論で解明されつつある分野はわずかで、未知、未解決の部分が多い。したがって〔Ⅳ〕も非常に tentative なものであることは言うまでもない。それは筆者自身のこの言語理論に対する未消化と研究対象範囲の狭さからくる本稿の限界でもある。特に残された不規則動詞形の研究は〔Ⅳ〕に最も直接的な修正を加えるだろうし、また動詞基体形式素の形態と名詞化の問題も屈折接辞と関連をもつので今後の課題となる。

〔注〕

1. Real Academia Española : *Gramática*, capítulo VI
2. William E. Bull : *Time, tense and the verb*, p.42
3. 同上
4. Charles E. Kany : *American-Spanish syntax*, p.55
5. James W. Harris : *Spanish phonology* はメキシコ・スペイン語のみを扱っている。
6. 最も権威あるとされ、代表的なのは Tomás Navarro : *Manual*
7. James W. Harris, op. cit.
8. Real Academia Española, op. cit., p.46 ; Rafael Seco : *Manual*, p.59 特に G.R.A. で2種の語幹を認めているため一層複雑になる欠点が目立つ。
9. W. E. Bull, op. cit. p.38
10. 同上 : 「直・現」で vosotros に対する i 活用類の法・時制・相標識を i, Person number terminals を is にしているから、得られる屈折形は /bibíis/ となる。/i/ を変更しないとするならば PN terminals にもう一つの異形態を加え -s~-is~-teis に訂正する必要がある。
11. M. Criado de val : *Gramática*, p.105 ; Julio Meza T. : *Gramática* p.67
12. Robert P. Stockwell, J. Donald Bowen, John W. Martin : *Grammatical structures*, p.105

13. J. Donald Bowen, Robert P. Stockwell: The phonemic interpretation of semivowels in Spanish, *Language* 31, 1955. Reprinted in Joos: *Readings* p.402
 —: A further note on Spanish semivowel, *Language* 32, 1956. *Readings* p.405
14. Charles F. Hockett: Problems of morphemic analysis, *Language* 23, 1947. *Readings*, p.239
15. 同上 p.238
16. Eugene A. Nida: The identification of morphemes, *Language* 24, 1948. *Readings*, p.257
17. Eduardo Benot: *Arte de hablar*, p.105
18. Nida, op. cit. p.269 の GK. $\lambda^{\circ}\omega$ /lu.ɔ.ɔ/ の例と同じケースである。
19. /a, á/ は音素論的に分布が規定される /a~á/ と, そうでない /aɔá/ を含むが, その境界は一般強勢規則のとらえ方により一定しない。以下ここでは /x, x',.../ の表記は上記のように /x~x'~.../ と /xɔx'ɔ.../ またはその組み合わせを含むものとする。ただし分節音素で形態音素的なものは明記した。例えば /ø, e~í/
20. op. cit. p.146
21. op. cit. p.91
22. op. cit. p.93
23. Roderick A. Jacobs, Peter S. Rosenbaum: *Grammar*, p.66
24. Noam Chomsky, Morris Halle: *Sound Pattern* pp.10~11
25. 同上 p.9
26. op. cit.
27. 交差分類をなす西語「法・時制・相」組織の分析は既に Llorach の *Gramática estructural* で試みられている。Harris の分類法は用語の違いを除けば Llorach のそれとほとんど同じである。
28. op. cit. pp.298~329

参 考 文 献

- Emmon Back: An introduction to transformational grammars, New York, 1964
 “ : 井上和子訳: 変形文法, 大修館 1969
- Eduardo Benot: *Arte de hablar-Gramática filosófica de la lengua castellana*, Buenos Aires, 1952
- William E. Bull: Time, tense and the verb. A study in theoretical and applied linguistics with particular attention to Spanish, Berkeley
- Noam Chomsky: *Syntactic Structures*, The Hague, 1957
 “ : Aspects of the theory of syntax, Cambridge Mass., 1965
 “ ; Morris Halle: *The sound pattern of English*, New York, 1968
- M. Criado de Val: *Gramática española*, 3ª ed., Madrid
- John B. Dalbor: *Spanish pronunciation, theory and practice*, Chicago, 1969
- Jerry A. Fodor, Jerrold J. Katz: *The structure of language*, Readings in the philosophy of lang-

- uage, Englewood Cliffs N. J., 1964
- Samuel Gili Gaya : Elementos de fonética general, Madrid, 1966
- H. A. Gleason : An introduction to descriptive linguistics, New York, 1967
- Robert T. Harms : Introduction to phonological theory, Englewood Cliffs, N. J., 1968
- James W. Harris : Spanish phonology, Cambridge Mass., 1969
- Zellig S. Harris : Structural linguistics, Chicago, 1966
- Roderick A. Jacobs, Peter S. Rosenbaum : English transformational grammar, Waltham Mass., 1968
- Roman Jakobson, Morris Halle : Fundamentos del lenguaje, Trad. de Fundamentals of language, Madrid, 1967
- Martin Joos : Readings in linguistics I, Chicago, 1967
- Charles E. Kany : American-Spanish syntax, Chicago, 1963
- H. A. Катагощина : Особенности фонологической системы современных иберо-романских языков, Москва, 1970
- Jerrold J. Katz, Paul M. Postal : An integrated theory of linguistic descriptions, Cambridge Mass., 1964
- Ronald W. Langacker : Language and its structure, New York, 1967
- Giulio C. Lepschy : La linguistica strutturale, Torino, 1966
- Emilio Alarcos Llorach : Gramática estructural, Madrid, 1951
- " : Fonología española, Madrid, 1965
- Jenaro MacLennan : El problema del aspecto verbal, Madrid, 1962
- Mabel V. Manacorda de Rosetti : La gramática estructural en la escuela secundaria, Buenos Aires, 1964
- " : La gramática estructural en la escuela primaria, Buenos Aires, 1965
- Julio Meza T. : Gramática castellana del siglo XX, Santiago de Chile, 1955
- Tomás Navarro : Manual de pronunciación española, New York, 1967
- " : Studies in Spanish phonology, Coral Gables, Fla., 1968
- Paul M. Postal : Aspects of phonological theory, New York, 1968
- Bernard Pottier : Phonétique et phonologie espagnoles, Paris, 1965
- " : Lingüística moderna y filología hispánica, Madrid, 1968
- " : Grammaire de l'espagnol, Paris, 1969
- Antonio Quilis, Joseph A. Fernández : Curso de fonética y fonología españolas, Madrid, 1969
- Real Academia Española : Gramática de la lengua española, nueva edición reformada de 1931, Madrid
- Mario Saltarelli : A phonology of Italian in a generative grammar, The Hague, 1970
- Rafael Seco : Manual de gramática española, Madrid, 1966

Robert P. Stockwell, J. Donald Bowen : The sounds of English and Spanish, Chicago, 1965

// : Patterns of Spanish pronunciation, Chicago, 1967

Robert P. Stockwell, J. Donald Bowen, John W. Martin : The grammatical structure of English
and Spanish, Chicago, 1965